

連載 関係からみた子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授, くじらホスピタル

重度の知的障碍と難治性てんかんをもつ男児

Q男：初診時年齢10歳7カ月，小学校4年生(特別支援学校)。

主訴(母親の訴え)：何でも口に入れる，母親に抱きついては噛みつく。

家族背景：両親とQ男，4歳上の兄の4人家族。近くに母方祖父母が住んでいる。父親は会社員，母親は週数日のパート勤務。両親同伴での受診である。

既往歴および発達歴：胎生期はとくに異常もなく，満期正常分娩。1歳8カ月，先天性心疾患のために根治術(人工心肺下)を受けたが，その際，低酸素脳症を発症。その後遺症のため，右優位の四肢麻痺と重度の知的障碍が残った。2歳11カ月頃よりてんかん発作が出現した。近くの大学病院で治療を受けたが，今日まで発作のコントロールは困難で，いまでも1日に数回発作が起こる。全身の痙攣，時には意識消失のみの発作があり，目が離せない。歩いていてもいつ発作が起こるかわからないため，母親はいつもそばにいないといけない状態であるが，最近になって，そばにいる母親に強く抱きついては母親の頭を噛みつくようになった。母親が突き放すと，かえって面白がり，ますます同じことを繰り返す，しだいに噛みつきがエスカレートするようになった。母親はいつ噛みつかれるかわからず，Q男が抱きつきにくると，身を硬くして戦々恐々としてしまう。Q男はイライラしていることが多く，突然，物を投げつけることもある。動きも活発になり，危険な行動をとるため，母親はどうしてもQ男の行動を制止してしまう。このように母子関係は悪循環を呈している。

夜もなかなか眠らず，布団を離れてはジュースを要求することが多い。一度眠ってもすぐに覚醒する。そのため，母親の疲労とストレスは極限状態に達している。最近では精神衛生のために，日中はヘルパーをつけ，母親はパート勤務で気分転換をはかっているという。Q男は，睡眠不足が発作を誘発し，学校では寝てしまうことが多い。このように，Q男の状態も悪循環に拍車がかかっているため，大学病院からの紹介で当院受診となった。

つい最近まで発作は就寝時のみであったが，昨年(2009年)4月に主治医が交代し，まもなく昼間も発作が起こるようになった。以来，薬物の変更が試みられたが，その頃より子ども返りが始まり，母親に抱きつくようになったという。

もともと人懐っこい性格で，おとなしくて親の言うことをよく聞くいい子だったが，昨年春頃から人が変わったように，非常に手がかかるようになった。自我が芽生えたのか，自分からの要求が増え，受け入れられないと駄々をこねて寝転がってはかんしゃくを起こすという。



初診時の状態

小学校4年生になった頃から、生活上さまざまな変化が起こっている。主治医の交代、てんかん発作が寝る前だけであったのが、昼間も起きるようになったこと、発作の増強のために土曜日のヘルパーが増員されたこと、学童保育の日数が土曜日の隔週から毎週に増えたこと、母親が仕事を開始したことなどである。

このような生活上の変化とQ男が前思春期に入ったことなどが相まって、心身に混乱状態をもたらしていることが想像できたが、それはいまの母子関係に強く反映されていた。いつ発作が起こるかわからないために、母親がいつもQ男のそばにいたようになったことで、Q男の子ども返り(退行)が誘発されるようになったことである。そのために母親に抱きつくようになっているのだが、母親に噛みつくために、母親は思わず身を硬くして突き放してしまう。するとQ男は心細くなって母親にしがみつこうとする。そんな悪循環が母子関係に生まれている。ここに「甘えのアンビバレンス」が起こっていることは容易に見てとれた。

初診時、Q男は発作直後で意識ももうろうとしていたが、ふらふらした状態でも、母親に盛んに抱きつくようとする。そして思わず反射的とも思えるように、母親の頭に噛みついていく。そのときの母親の形相は、恐怖に怯えて全身に強い緊張が走っているのがよくわかり、こちらも見ているのがつらいほどである。母親は以前から重症のアレルギー疾患や高血圧などを抱えていて、心身の疲労は極限状態に達していると思われる。父親は穏やかな印象を受け、表向きはQ男に優しく接しており、母親にも協力的な態度であった。

本事例は母子の「関係障壁」として見立てることがこのほか重要であると判断し、まずはQ男のアンビバレンスと衝動性の亢進に対して、少量の抗精神病薬ハロペリドール[®]を処方(1.5mg/日)するとともに、母親の疲労状態に対してしっかりサポートすることが先決であると思われた。

面接のなかで、Q男の脳障壁が心疾患の手術の後遺症であることに対する両親、とりわけ母親の罪悪感が非常に強いことが感じられたが、ここではそのことをとくに大きく取り上げることは控えた。治療は原則、週1回とした。

関係発達支援の経過

●第2～4回

【睡眠の改善】

1週間後、抗精神病薬により、Q男は熟睡するようになった。機嫌もよいことが多くなり、食欲も旺盛になった。それとともに、情緒的にはめそめそしたり、怒りっぽくなった。遊戯室ではふらふらしながらも盛んに動き回るようになり、そばにいたスタッフに無差別に抱きつくなど、Q男の人懐っこさを彷彿とさせたが、周りの大人に対する態度を見ると、誰彼の区別なく接しており、何をやりたいのか、何をしてほしいのか判然とせず、Q男の心の世界は漠としているのが特徴的であった。そこで筆者は、両親に以下のように助言した。

Q男のいまの心理状態は退行していて、甘えたいという気持ちが非常に強いが、周囲の大人の区別もつかないくらいに漠然とした状態にある。そのため、言葉で言いつけようとしても無理なので、言葉で指示するようなことは極力控えてほしい。できれば、Q男が何をしてほしいのか、どんな気持ちなのか、そうしたことを理解するように努めてほしい。ただ、母子関係には悪循環が生まれているので、母親の精神状態が回復することが何より大切なので、筆者がしっかりサポートすることを伝えた。

両親はQ男が子ども返りしていることを少しずつ理解するようになっていたが、どうしてもQ男に対して注意や叱咤が多いこと、とくに夕方の忙しいときは目が離せないため、ひどく疲れると語っていた。

【厳しい口調でつい注意をしてしまう父親の心情】

治療が終わって帰るとき、Q男が靴を自分で履こうとせず、母親の手を煩わせているのを見た父親は、厳しい口調で、「靴(自分で)履きなきゃ駄目だよ!」と叱りつけていたが、Q男は表情ひとつ変えず、まるで父親の言うことを聞いていないかのようであった。いまのQ男の状態に対して、父親が抱えている複雑な心境を垣間見る思いだった。

●第5～6回(初診から1カ月後)

【Q男の遊びの意図を感じとれず、注意する母親】

情緒的には安定してきた。遊戯室で親子ともども一緒に過ごしているが、Q男はいつものようにふらふらとした足取りで部屋の

中を歩き回っている。両親はその様子を見ながら、どのように相手をしてよいか困惑し、所在なげにしている。そうしたなかで、Q男は手押し車に乗って、運転手になり、足を使って車を動かした。ぎこちない姿勢と足取りのため、車に乗ったまま倒れそうになるが、Q男はかえってそれを楽しんでいる様子で、何度も動かすうちに、しだいにわざとらしく、大げさに倒れそうになった。付き合っていた助手が「ああ、びっくりした！」と驚いてみせると、Q男は「びっくりしない！」と強い口調で言い返している。Q男が意図的にこのような行動をとっていることがうかがわれたが、両親はすぐにこのような遊びをやめさせようとするばかりであった。こうしたところにも日頃のQ男の行動に対して、何でも禁止したり注意したりするばかりのかかわりであることを彷彿とさせた。両親にとってQ男の遊びの意図を感じとることは今まで難しいことが見てとれた。

何でもすぐに口に持っていくことは相変わらずであったが、母親への噛みつきが減ってきたことが報告された。

●第7～9回

【Q男に噛みつかれた母親のトラウマ】

これまで、周りにいる人であれば誰彼関係なくすぐに抱きついてきたが、1カ月ほど経過した頃から、母親に集中して抱きつくようになった。これは母親への甘えが強まってきたことが感じとれた。しかし、遊戯室では、Q男が近づくと、母親の表情には思わず緊張が走り、怯えているのが手にとるようにわかった。Q男に抱きつかれると、すぐに母親は周りの玩具に気を逸らせて、何かで遊ばせようとしていた。ここに母親のアンビバレンスが如実に反映していたが、これまでさんざんQ男に噛みつかれてきたことが、母親にトラウマとして強く残っているためであろうと思われた。そうしたことをさりげなく母親に印象として述べて、母親の苦勞を思いやった。

【Q男の顔つきがしっかりしてきた】

2カ月ほど経つと、初期の頃の呆然とした顔つきもしっかりしてきて、こちらに向ける視線も焦点が合うようになった。気に入った手押し車に乗ってクラクションを鳴らす様子を見て、助手がその音に合わせて「ブザー」と声をかけると、にやっと控えめに笑っている。その後、ビニールボールがたくさん入った箱を引っくり返して、箱の中を覗いてボールを揺らして楽しんでいる。いろいろな感覚刺激を楽しんでいることがうかがわれたが、いまの

両親にはそうしたQ男の遊び感覚につき合えるほど、心のゆとりはまだないと思われ、あえてそのことはここでは触れないことにした。

【手術時の親子の別れから時間が止まっている】

助手がQ男の遊びの相手をしている間、筆者は両親と面接をしていたが、父親からQ男の1歳8カ月のときの話が語られた。心臓手術のために手術室に入るとき、母親は抱いていたQ男を執刀医に引き渡したが、そのとき、Q男はこちらをじっと見ていた。そして、母親と引き離されたことに反応して心細い表情を浮かべていた。そのときの視線がいまでも忘れられないという。それ以来、時間がストップしてしまったようだというのである。この手術の後遺症で重度の知的障害と難治性のでんかんが起ってしまったわけであるから、両親の罪悪感、自責感は想像のつかないほど大きなものであることが想像できた。そのため、このときの筆者は、ただ黙って聞いていた。

【遊びの意図も掴みやすくなってきた】

これまではQ男はいつも漠とした感じで遊んでおり、何をどうしたいのか、付き合っても非常にわかりにくい状態であったが、この頃には歩行もしっかりしてきて、ボールに乗って、それを触ったり、鉄砲を打ったときの音の感触を楽しむなど、感覚遊びを楽しんでいる様子が非常にわかりやすいかたちで感じとれるようになってきた。

【助手に抱きつく不自然な姿勢】

遊びに付き合っている助手によく抱きつきにくるが、そのときの姿勢は、上半身の両腕で助手の身体にしがみつこうにする。しかし、下半身の両足は折り曲げていて、まるで助手の身体に直接触れるのを避けるようにしていた。こうしたところにQ男のアンビバレンスがまだまだ強く認められた。

●第10～11回(4カ月)

【うつ状態の母親への治療を提案】

母親の体調がいまだ思わしくないことが容易に見てとれたので、具体的に聞いていくと、重症の杉花粉症、高血圧、腎臓病など、いくつもの重い病気を抱えていることがわかったが、それとともに、心理的にもあきらかに、うつ状態であることが見てとれた。そこで筆者は、母親が健康を少しでも取り戻すことが母子関

係の改善には不可欠であることをていねいに説明し、母親にも、うつ病の治療を並行して実施することを提案した。すると母親は素直に受け入れたため、治療を開始し、抗うつ剤 SSRI (Selective Serotonin Reuptake Inhibitors, 選択的セロトニン再取り込み阻害剤)をさっそく少量処方した。

【抱きついてきた子どもを思わず遊びに誘う母親】

Q男は遊んでいても、急に思い立ったように、母親に接近して抱きつこうとする。すると、すぐさま母親は「ほら、〇〇で遊んだら」と遊びに誘って、自分から結果的に、Q男を突き放してしまっている。それを見ていた父親も、Q男が垂らしていた涎をすぐに拭いてやっっては「噛んだら駄目だよ」と厳しく注意している。すると、ためらっていたQ男は、母親を噛みつき始めていた。このように父親に禁止されると、逆にますます噛みつきこうとする。そうした悪循環を両親に指摘すると、これまで母親はQ男に抱きつかれては噛みつかれ、恐怖でパニックを起こすこともあり、父親もそれを見て、何とか助けようと試みてきたというのであった。

あまりにも凄まじい親子関係の悪循環に拍車がかかっていたことが、はっきりと浮かび上がってきた。

【しだいに自然に抱きつくようになる】

助手に抱きつくときの視線は数回前まで非常に不自然であったが、しだいに身体を密着するようにして、べったりと抱きつくようになってきた。こうしたところにも、Q男のアンビバレンスが緩んできていることを感じさせた。

【母親への噛みつきも減少】

母親のQ男に対する警戒的な構えは、かなり緩んできたことが感じられたが、それに呼応するようにして、Q男は母親に抱きつきにいても、噛みつくことがほとんどなくなってきた。Q男は口を母親に近づけて、キスをするような仕草を盛んにするようになった。

●第12～13回(5カ月)

【さまざまな情緒的反応をみせるようになってきた】

Q男は自宅で筆筒から自分の靴下を次々に出そうとする。それを見た母親が注意して駄目だと言うと、泣くようになったという。台所に行こうとするので、いまは駄目と言ってもすぐに泣くようになった。自分で何かをやりたそうにしているのに、母親から禁

止されて悔し泣きしているように見える。「いやだ！ いやだ！」「ちがう！」と盛んに自己主張するようになってきたともいう。DVDを見たがっているのも、これと思ったものを映してやると、気に入らずに、「違う」と訴える。好き嫌いをしっかりと訴えるようになってきた。それまでの漠としていた様子からは想像もつかないほどにしっかりと自己主張するようになってきたことがうかがわれた。

このような自己主張と並行して、母親への抱きつきと噛みつきもみるみる減ってきた。

【プールでのエピソード】

プールが好きで毎週のように出かけていたが、これまでは水の中に潜るのを非常にいやがっていた。少しでも顔が濡れるとスイミングキャップを取ってすぐに拭くほどであった。しかし、先日プールに行ったときは、Q男の様子がいつもと違っていることに指導員が気づいて、錘のバトンを水中にわざと落として沈め、Q男の足元に置いてみた。すると、Q男は自分から水の中に顔をつけて潜りだし、そのバトンを自分で取った。顔が水に濡れるのをまったくいやがらなかった。さらにビート板を使って泳ぎだし、足をバタバタと動かし始めたという。

好奇心が高まるにつれ、それまでの水に対する怯えが影を潜めてきたことがうかがわれるエピソードである。以来、プールに入るのを怖がらなくなり、待ち遠しくて仕方がないのか、以後プールに行くと、すぐに水の中に入りたがるようになった。

【母親も生氣を取り戻してきた】

Q男の抱きつきと噛みつきが影を潜めてからは、母親の生氣も回復するとともに、Q男の自己主張が明瞭になってきた。自分で欲しいもの、いやなものの区別がはっきりしてきた。そのため、目を離すと、自分からいろいろと探索行動をとるようになってきた。

時にQ男が母親に抱きついてきて髪を掴むと、母親は泣いたまねをして、「どうしたの」と穏やかに反応することができるようになり、するとすぐにQ男は手を緩めるようになった。母親の恐怖心も少しずつ減少していることがうかがわれた。

●第14～15回(5カ月)

【ことばでの要求とその意味】

ことばでの要求が増えてきた。先日以来プールが気に入り、毎

日のように「プール！」と盛んに要求するようになった。母親は執拗な要求に困り果て、頭ごなしに駄目だと拒否するばかりになった。そうした母親の様子を見ていて、そばにいた祖母が「それじゃ、風呂に入れてみたら」と助言してくれた。母親がさっそく風呂に入れてやると、喜んで遊んでいた。

Q男の「プール(に行きたい)」という要求のことばを母親は文字どおりに受け止めて対応していたが、祖母がことばの裏に隠れたQ男の思いを敏感に察したため、事態が好転したことを示すエピソードである。いまの母親にはQ男のことばを字義的に受け止めすぎてしまい、ことばの裏で何を求めているのかを推測するというゆとりのなさが、ここにもうかがえるのであった。

【ぐずって駄々をこねるようになった】

朝、スクールバスに乗って登校するとき、昼間、ヘルパーと外出するときなどに、家を出るまではいつものように張り切っているのに、いざ母親と別れる段になると、急にぐずってめそめそするようになった。ちょうど駄々をこねる幼な子のように なってきた。しかし、このようなQ男の変化は、いまのようなゆとりのない母親にとっては堪え難いものもあるようで、つい厳しく接するという。このような変化はこれまでの経過を考えると、肯定的に受け止める必要性を感じる筆者ではあったが、母親にはあまりに

も負担が大きすぎるのであろう、なかなか前向きには受け止めがたいところがあるのが正直なところであった。

【止まっていた親子の時間が流れ始めている】

ただ、ここで筆者は、両親にぜひとも思い起こしてほしいことをいねいに取り上げた。それは1歳8カ月で手術を受けた際のQ男が、母親と別れて手術室に入った光景から時間が止まったように感じていると、父親自ら語っていたことであった。今回受診となった契機が、Q男の母親への甘えの気持ちが前思春期に差し掛かって急速に強まってきたことを考えると、いまの母子関係の変化は、1歳8カ月から止まっていた親子の時間が再び流れ始めたことを示している。そのように考えると、この事態は母子関係を修復する絶好の機会であると思われたからである。

【これまでの経過を振り返って】

いまだ予断を許さない緊迫した状況が続いてはいるが、今後、Q男の身体がますます大きくなり、再び不安定になったときのことを想像すると、この機会を逃してはならない。しっかりとしたサポート体制をつくって、何とか両親がこの事態を乗り越えてくれればと思うのである。

小児看護

2010年 5 月号

医療機器使用中における
小児の看護